

『資本論』 第1部 資本の生産過程

第1篇商品と貨幣 第1章商品 / 第2章交換過程 / 第3章貨幣または商品流通

第1章商品

第1節 商品の二つの要因 使用価値と価値(価値実態 価値量)

なぜ商品の分析から始めるか⇒「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、ひとつの「巨大な商品の集まり」として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる。」(「国民文庫」版 P71)

商品の二つの要因

- ／使用価値:人間の欲望を満たさせる物、有用性、質的
- ／交換価値:他の商品との交換比率、「現象形態」
- ＼価値(量的)
- ＼価値実体:労働生産物、生産するのに費やされた労働時間

第2節 商品に表される労働の二重性

商品生産労働の二重性

- ／具体的有用労働:使用価値を作る具体的な労働
- ＼抽象的人間労働:価値を作る社会的平均的な人間労働

第3節 価値形態または交換価値

価値形態⇒なぜ貨幣が発生したのか、その謎を明らかにする。

「諸商品は、それらの使用価値の現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態—貨幣形態を持っているということだけは、だれでも、ほかのことはなにも知っていなくても、よく知っていることである。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をそのもっとも単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。」(「国民文庫」版 P93～P94)

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

x量の商品 A=y量の商品 B またはx量の商品 Aはy量の商品 Bに値する。
(20エレのリンネル=1着の上着 または20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

一 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえ、この価値形態の分析には固有の困難がある。

ここでは二つの異種の商品 A と B、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの違った役割を果たしている。リンネルは自分の価値を上着で表しており、上着はこの価値表現

の材料として役立つ。第一の商品は能動的な、第二の商品は受動的な役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表される。言い換えれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能している。言い換えれば、その商品は等価形態にある。

二 相対的価値形態

a 相対的価値形態の内実

一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちどのようひそんでいるのかを見つげだすためには、この価値関係をさしあたりまずその量的面からはまったく離れて考察しなければならない。

上着が価値物としてリンネルに等値されることによって、上着に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等値される。

ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自の性格を顕わにするのである。というのは、この等価表現は、異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の労働を、実際に、それらに共通なものに、人間労働一般に、還元するのだからである。

価値表現の媒介によって、商品 B の現物形態は商品 A の価値形態になる。商品 A が、価値体としての、人間労働の物質化としての商品 B に関係することによって、商品 A は使用価値 B を自分自身の価値表現の材料にする。商品 A の価値は、このように商品 B の使用価値で表現されて、相対的価値の形態をもつのである。

b 相対的価値形態の量的規定性

その価値が表現されるべき商品は、それぞれが与えられた量の使用対象であって、15シェツフルの小麦とか100ポンドのコーヒーとかいうものである。この与えられた商品量は一定量の人間労働を含んでいる。だから、価値形態は、ただ価値一般だけではなく、量的に限定された価値すなわち価値量をも表現しなければならない。

20エレのリンネルまたは1着の上着の生産に必要な労働時間は、織布または裁縫の生産力の変動につれて変動する。

三 等価形態

一商品 A (リンネル) は、その価値を異種の一商品 B (上着) の使用価値で顕すことによって、商品 B そのものに、ひとつの独特な価値形態、等価物という価値形態を押し付ける。

一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。

一商品の等価形態はけっして量的な価値規定を含んではいないのである。

等価形態の考察にさいして目に付く第一の特色は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである。

具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になるということは、等価形態の第二の特色なのである。

私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になるということは、等価形態の第三の特色である。

アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちの一つの同等性関係を発見しているということにうちに、光り輝いている。ただ、彼の生きていた社会の歴史的な限界が、ではこの同等性関係は「ほんとうは」なんであるのか、を彼が見つけだすことを妨げているだけである。

四 単純な価値形態の全体

ある商品の単純な価値形態は、異種の一商品に対するその商品の価値関係のうち、すなわち異種の一商品との交換関係のうち、含まれている。商品 A の価値は、質的には、商品 A との商品 B の直接的交換可能性によって表現される。商品 A の価値は、量的には、商品 A の与えられた量との商品 B の一定量の交換可能性によって表現される。言いかえれば、一商品の価値は、それが「交換価値」として表示されることによって独立に表現されている。この章のはじめに、普通の言い方で、商品は使用価値であるとともに交換価値である、と言ったが、これは厳密に言えば間違いだった。商品は使用価値または使用対象であるとともに「価値」なのである。商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換形態という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現れるのであって、商品は、孤立的に考察されたのでは、この交換価値はという形態をけっしてもたないのであり、つねにただ第二の異種の一商品に対する価値関係または交換関係のなかでのみこの形態を持つのである。

商品の価値形態または価値表現は商品価値の本性から出てくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現から出てくるのではない。

個別的価値形態によっては、一商品 A の価値はただひとつの別種の商品で表現されるだけである。しかし、この第二の商品がどんな種類のものであるのか、上着や鉄や小麦などのどれであるのかは、まったくどうでもよいのである。つまり、商品 A が他のどんな商品種類にたいして価値関係にはいるかにしたがって、同じひとつの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである。商品 A の可能な価値表現の数は、ただ商品 A とは違った商品種類の数によって制限されているだけである。それゆえ、商品 A の個別的な価値表現は、商品 A のいろいろな単純な価値表現のいくらかでも引き伸ばせる列に転化するのである。

B 全体的な、または展開された価値形態

z量の商品 A = u量の商品 B
= v量の商品 C
= w量の商品 D
= x量の商品 E
= etc.

20エレのリンネル = 1着の上着
= 10ポンドの茶
= 40ポンドのコーヒー
= 1クォーターの小麦
= 2オンスの金
= 1/2トンの鉄
= その他

一 展開された相対的価値形態

ある一つの商品、たとえばリンネルの価値は、今では商品世界の無数の他の要素で表現される。他の商品体はどれもリンネル価値の鏡になる。こうして、この価値そのものが、はじめてほんとうに、無差別な人間労働の凝固として現れる。

第一の形態、20エレのリンネル＝1着の上着 では、これら二つの商品が一定の量的割合で交換されうるということは、偶然的事実でありうる。これに反して、第二の形態では、偶然的現象とは本質的に違ってそれを規定している背景が、すぐに現れてくる。リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄など無数の違った所持者のものである無数の違った商品のどれで表されようと、つねに同じ大きさのものである。二人の個人的商品所持者の偶然的な関係はなくなる。交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換割合を規制するのだ、ということが明らかになる。

二 特殊的等価形態

上着や茶や小麦や鉄などの商品はどれもリンネルの価値表現では等価物として、したがってまた価値体として、認められている。これらの商品のそれぞれの特定の現物形態は、いまでは他の多くのものと並んで一つの特殊的等価形態である。

三 全体的な、または展開された価値形態の欠陥

第一に、商品の相対的価値表現は未完成である。

第二に、この連鎖はばらばらな雑多な価値表現の多彩な寄木細工をなしている。

最後に、それぞれの商品の相対的価値が、当然そうならざるをえないこととして、この展開された形態で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも違った無限の価値表現列である。

展開された相対的価値形態の欠陥は、それに対応する等価形態に反映する。ここでは各個の商品種類の現物形態が、無数の他の特殊的等価形態と並んでひとつの特殊的等価形態なのだから、およそただそれぞれが互いに排除しあう制限された等価形態があるだけである。

20エレのリンネル＝1着の上着

20エレのリンネル＝10ポンドの茶

しかし、これらの等式は、それぞれ、逆にすればまた次のような同じ意味の等式を含んでいる。

1着の上着＝20エレのリンネル

10ポンドの茶＝20エレのリンネル

C 一般的価値形態

1着の上着	=	
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1クォーターの小麦	=	20エレのリンネル
2オンスの金	=	
1/2トンの鉄	=	
x 量の商品 A	=	
等々の商品	=	

一 価値形態の変化した性格

いろいろな商品はそれぞれの価値をここでは、(一)単純に表している、というのは、ただ一つの商品で表しているからであり、そして(二)統一的に表している、というのは、同じ商品で表しているからである。諸商品の価値形態は単純で共通であり、したがって一般的である。

形態 I と II はどちらも、ただ、一商品の価値をその商品自身の使用価値またはその商品体とは違ったものとして表現することしかできなかった。

第一の形態が実際にはっきりと現れるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折の交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである。

第二の形態は第一の形態よりももっと完全に一商品の価値をその商品自身の使用価値から区別している。他方、ここでは諸商品の共通な価値表現はすべて直接に排除されている。展開された価値形態がはじめて実際に現れるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にではなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換をされるようになったときのことである。

新たに得られた形態は、商品世界の価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうして、すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表す。

二 相対的価値形態と等価形態との発展関係

相対的価値形態の発展の程度には等価形態の発展の程度が対応する。しかし、これは注意を要することであるが、等価形態の発展はただ相対的価値形態の発展の表現と結果でしかないのである。

価値形態一般が発展するのと同じ程度で、その二つの極の対立、相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する。

三 一般的価値形態から貨幣形態への移行

一般的等価形態は価値一般の一つの形態である。だから、それはどの商品にでも付着することができる。他方、ある商品が一般的等価形態(形態 III)にあるのは、ただ、それが他のすべての商品によって等価物として排除されるからであり、また排除されるかぎりでのことである。そして、この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、はじめて商

品世界の統一な相対的価値形態は客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とをかちえたのである。

そこで、その現物形態に等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品になる。

ある一定の商品が歴史的にかちとった。すなわち、金である。

D 貨幣形態

20エレのリンネル	=	
1着の上着	=	
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1クォーターの小麦	=	2オンスの金
1/2トンの鉄	=	
x 量の商品 A	=	
等々の商品	=	

形態Ⅰから形態Ⅱへの、また形態Ⅱから形態Ⅲへの移行では、本質的な変化が生じている。これに反して、形態Ⅳは、いまではリンネルに代わって金が一般的等価形態をもっているということのほかには、形態Ⅲと違うところは何もない。形態Ⅳでは金は、やはり、リンネルが形態Ⅲでそれだったもの——一般的等価物である。前進は、ただ、直接的な一般的交換可能性の形態または一般的等価形態が今では社会的慣習によって最終的に商品金の独自の現物形態と合生しているということだけである。

第四節 商品の呪物的性格とその秘密

商品は、一見、自明な平凡なものに見える。商品の分析は、商品と非常にへんてこなもので形而上学的な小理屈や神学的な小言でいっぱいなものだということを示す。商品が使用価値であるかぎりでは、その諸属性によって人間の諸欲望を満足させるものだという観点から見ても、あるいは人間労働の生産物としてはじめてこれらの属性得るものだという観点から見ても、商品には少しも神秘的なところはない。

商品の神秘的な性格は商品の使用価値からは出てこないのである。それはまた価値規定の内容からも出てこない。

労働生産物が商品形態をとるとき、その謎のような性格はどこから生ずるのか？
明らかにこの形態そのものからである。

商品形態の秘密はただ単に次のことのうちにあるわけである。すなわち、商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらのものの自然的属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き替えによって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的であるもの、または社会的な物になるのである。

人間の頭の産物が、それ自身の生命を与えられてそれら自身のあいだでも人間とのあいだでも関係を結ぶ独立した姿に見える。同様に、商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを私は呪物崇拝と呼ぶのであるが、それは、労働生産物が商品として生産されるや否やこれに付着するものであり、したがって商品生産と不可分なものである。

このような、商品世界の呪物的性格は、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずるものである。

およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない。

(以下は、マルクスの考える将来の共産主義・社会主義社会の在り方について、マルクスが『資本論』で言及した数少ない箇所のひとつ:引用者注)

共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識してひとつの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体を考えてみよう。

労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役立つ、したがってまた共同生産物中の個人的に消費されうる部分における生産者の個人的な分け前の尺度として役立つ。人々が彼らの労働や労働生産物にたいしてもつ社会的関係は、ここでは生産においても分配においてもやはり透明で単純である。

第二章 交換過程

商品は、自分で市場に行くことはできないし、自分で自分たちを交換し合うこともできない。だから、われわれは商品の番人、商品所持者を捜さなければならない。商品の番人たちは、自分たちの意志をこれらのものにやどす人として、互いに相対しなければならない。したがって、一方はただ他方の同意のもとにのみ、すなわちどちらも両者に共通な一つの意志行為を媒介としてのみ、自分の商品を手放すことによって、他人の商品を自分のものとするのである。それゆえ、彼らは互いに相手を私的所有者として認めあわなければならない。契約を形態とするこの法的関係は、法律的に発展していてもいなくても、経済的關係がそこに反映している一つの意志関係である。この意志関係、または法的関係の内容は、経済的關係そのものによって与えられている。ここでは、人々はただ互いに商品の代表者としてのみ、存在する。一般に、われわれは、展開が進むにつれて、人々の経済的扮装はただ経済的諸関係の人化でしかないであり、人々はこの経済的諸関係の担い手として互いに相対するのだということを見出すであろう。

貨幣結晶は、種類の違う労働生産物が実際に互いに等値され、したがって実際に商品に転化される交換過程の、必然的な産物である。

商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる。しかし、物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる。

一般的等価形態は、それが生み出した一時的な社会的接触と一緒に発生し消滅する。かわるがわる、そして一時的に、一般的等価形態はあれこれの商品に付着する。しかし、商品交換の発展につれて、それは排他的に特別な商品種類だけに固着する。言いかえれば、貨幣形態に結晶する。

商品交換がその局地的限界を打ち破り、したがって商品価値が人間労働一般の物質化に発展してゆくにつれて、貨幣形態は、生来一般的等価物の社会的機能に適している諸商品に、貴金属に、移ってゆく。

「金銀は生来貨幣なのではないが、貨幣は生来金銀である」ということは、金銀の自然属性

が貨幣の諸機能に適しているということを示している。

第三章 貨幣または商品流通

第一節 価値の尺度

金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、または、諸商品価値を同名の大きさ、すなわち質的に同じで量的に比較可能な大きさとして表すことにある。こうして、金は諸価値の一般的尺度として機能し、ただこの機能によってのみ、金という独自の等価物商品はまず貨幣になるのである。

第二節 流通手段

A 商品の変態

商品の交換過程は次のような形態変換をなして行われる。

商品—貨幣—商品 W—G—W

W(Ware)(ヴェー): 商品

G(Geld)(ゲー): 貨幣

W—G、商品の第一変態または売り。

商品体から金体への商品価値の飛び移りは「商品の命がけの飛躍」である。

G—W、商品の第二の、または最終の変態、買い。

G—W、買いは、同時に、売り、W—G である。したがって、ある商品お最後の変態は、同時に他の一商品の最初の変態である。

商品に内在する使用価値と価値との対立、私的労働が同時に直接に社会的な労働として現れなければならないという対立、特殊な具体的労働が同時にただ抽象的一般的労働としてのみ認められるという対立、物の人化と人の物化という対立—この内在的な矛盾は、商品変態の諸対立においてその発展した運動形態を受け取るのである。それゆえ、これらの形態は、恐慌の可能性を、しかしただ可能性だけを、含んでいるのである。この可能性の現実性への発展は、単純な商品流通の立場からはまだまったく存在しない諸関係の一大範囲を必要とするのである。

商品流通の媒介者として、貨幣は流通手段という機能をもつことになる。

b 貨幣の流通

商品はいつも売り手の側に立ち、貨幣はいつでも購買手段として買い手の側に立っている。貨幣は商品の価格を実現することによって、購買手段として機能する。貨幣は、商品の価格を実現しながら、商品を売り手から買い手に移し、同時に自分は買い手から売り手へと遠ざかって、また別の商品と同じ過程を繰り返す。

貨幣に流通手段の機能が属するのは、貨幣が諸商品の価値の独立化されたものであるからにほかならない。だから、流通手段としての貨幣の運動は、実際は、ただ商品自身の形態運動でしかないのである。

どの商品も、流通への第一歩で、その第一の形態変換で、流通から脱落し、そこには絶えず新たな商品がはいってくる。これに反して、貨幣は流通手段としてはいつでも流通部面に住んでおり、絶えずそのなかを駆けまわっている。

流通手段として機能する貨幣の総量は、一方では、流通する商品の価格総額によって、他方では貨幣流通の平均速度によって規定されている。

$$\frac{\text{諸商品の価格総額}}{\text{同名の貨幣片の流通回数}} = \text{流通手段として機能する貨幣の量}$$

c 鑄貨 価値章標

流通手段としての貨幣の機能からは、その鑄貨姿態が生ずる。

流通しているうちに金鑄貨は、あるものはより多く、あるものはより少なく摩滅する。金の称号と金の実体とが、名目純分と実質純分とが、その分離過程を開始する。同名の金鑄貨でも、重量が違うために、価値の違うものになる。

貨幣流通そのものが鑄貨の実質純分を名目純分から分離し、その金属定在をその機能的定在から分離するとすれば、貨幣流通は、金属貨幣がその鑄貨機能では他の材料からなっている章標または象徴によって置き替えられるという可能性を、潜在的に含んでいる。

銀製や銅製の章標の金属純分は、法律によって任意に規定されている。それらは流通しているうちに金鑄貨よりももっと速く摩滅する。それゆえ、それらの鑄貨機能は事実上それらの重量にはかかわりのないものになる。すなわち、およそ価値というものにはかかわりのないものになる。金の鑄貨定在は完全にその価値実体から分離する。つまり、相対的に無価値なもの、紙券が、金に代わって鑄貨として機能することができる。金属性の貨幣賞標では、純粹に象徴的な性格はまだいくらか隠されている。紙幣では、それが一見してわかるように現れている。

ここで問題にするのは、ただ、強制通用力のある国家紙幣だけである。それは直接に金属流通から生まれてくる。これに反して、信用貨幣は、単純な商品流通の立場からはまだまったくわれわれに知られていない諸関係を前提する。だが、ついでに言えば、本来の紙幣が流通手段としての貨幣の機能から生ずるように、信用貨幣は、支払手段としての貨幣の機能にその自然発生的な根源をもっているのである。

第三節 貨幣

価値尺度として機能し、したがってまた自分の肉体でかまたは代理物によって流通手段として機能する商品は、貨幣である。それゆえ、金(または銀)は貨幣である。

a 貨幣蓄蔵

二つの反対の商品変態の連続的な循環、または売りと買いとの流動的な転換は、貨幣の無休の流通、または流通の永久自動機関としての貨幣の機能に現れる。変態列が中断され、売りが、それに続く買いによって補われなければ、貨幣は不動化され、または、ポアギューベールの言うところでは、可動物から不動物に、鑄貨から貨幣に、転化する。

商品流通そのものの最初の発展とともに、第一の変態の産物、商品の転化した姿態または商品の金蛹を固持する必要と熱情とが発展する。商品は、商品を買うためにではなく、商品形態を貨幣形態と取り替えるために、売られるようになる。この形態変換は、物質代謝の単なる媒介から自己目的になる。商品の離脱した姿は、商品の絶対的に譲渡可能な姿またはただ瞬間的な貨幣形態として機能することを妨げられる。こうして、貨幣は蓄蔵貨幣に化石し、商品の売り手は貨幣蓄蔵者になるのである。

商品流通が始まったばかりのときには、ただ使用価値の余剰分だけが貨幣に転化する。こうして、金銀は、おのずから、有り余るものまたは富の社会的な表現になる。このような貨幣蓄蔵の素朴な形態が永久化されるのは、かたく閉ざされた欲望範囲が伝統的な自給自足的な生産様式に対応している諸民族の場合である。

貨幣蓄蔵の衝動はその本性上無際限である。

金を、貨幣として、したがって貨幣蓄蔵の要素として、固持するためには、流通することを、または購買手段として享楽手段になってしまうことを、妨げなければならない。それだから、貨幣蓄蔵者は黄金呪物のために自分の肉体の欲望を犠牲にするのである。彼は禁欲の福音を真剣に考える。他方では、彼が貨幣として流通から引きあげることができるものは、ただ、彼が商品として流通に投ずるものだけである。彼は、より多く生産すればするほど、より多く売ることができる。それだから、勤勉と節約と貪欲とが彼の主徳をなすのであり、たくさん売って少なく買うことが彼の経済学の全体をなすのである。

貨幣蓄蔵は金属流通の経済ではいろいろな機能を果たす。まず第一の機能は、金銀鑄貨の流出条件から生ずる。すでに見たように、商品流通が規模や価格や速度において絶えず変動するのにつれて、貨幣の流通量も休みなく満ち干きする。だから、貨幣流通量は、収縮し膨張することができなければならない。あるときは貨幣が鑄貨として引き寄せられ、あるときは鑄貨が貨幣としてはじき出されなければならない。現実に流通する貨幣量がいつでも流通部の飽和度に適合しているようにするためには、一国にある金銀量は、現に鑄貨機能を果たしている金銀量よりも大きくななければならない。この条件は、貨幣の蓄蔵貨幣形態によって満たされる。蓄蔵貨幣貯水池は流通する貨幣の流出流入の水路として同時に役立つのであり、したがって、流通する貨幣がその流通水路からあふれることはないのである。

b 支払手段

商品流通の発展につれて、商品の譲渡を商品価格の実現から時間的に分離するような事情が発展する。

一方の商品種類はその生産により長い時間を、他方の商品種類はより短い時間を必要とする。商品が違えば、それらの商品は違った季節に結びつけられている。一方の商品は、その市場がある場所で生まれ、他方の商品は遠隔の市場に旅しなければならない。したがって、一方の商品所有者は、他方が買い手として現れる前に、売り手として現れることができる。

買い手は、その代価を支払う前に、それを買うわけである。一方の商品所有者は、現に在る商品売り、他方は、貨幣の単なる代表者として、また将来の貨幣の代表者として買うわけである。売り手は債権者となり、買い手は債務者となる。ここでは、商品の変態または商品の価値形態の展開が変わるのだから、貨幣もまた別の一機能を受け取るのである。貨幣は支払手段になる。

支払手段は流通にはいつてくるが、しかし、それは商品がすでに流通から出て行ってからのことである。貨幣はもはや過程を媒介しない。貨幣は交換価値の絶対的定在または一般的商品として、過程を独立に閉じる。

c 世界貨幣

国内流通部面から外に出るときには、貨幣は価格の度量標準や鑄貨や補助貨や価値章標という国内流通部面できあがる局地的な形態を再び脱ぎ捨てて、貴金属の元来の地金形態に逆もどりする。

国内流通部面ではただ一つの商品だけが価値尺度として、したがってまた貨幣として、役立つことができる。世界市場ではことおりの価値尺度が、金と銀とが、支配する。

世界貨幣は、一般的支払手段、一般的購買手段、富一般の絶対的社会的物質化として機能する。支払手段としての機能は、国際貸借の決済のために、他の機能に優越する。

各国は、その国内流通のために準備金を必要とするように、世界市場流通のためにもそれを必要とする。後者の役割のためには、つねに現実の貨幣商品、生身の金銀が要求される。それだからこそ、ジェームズ・ステュアートは、金銀を、それらの単なる局地的代理物から区別して、はっきりと世界貨幣と呼んで特徴づけているのである。